

書評01

齋藤 隼飛 編

『プラットフォーム新時代 ーブロックチェーンか、協同組合かー』

社会評論社 / 2019 年 10 月刊 / 160 ページ / 900 円 + 税
ISBN 978-4-784-54145-4

評者：宮崎 崇将
追手門学院大学経営学部 准教授



「Uber Eats」の緑色のロゴが入ったバッグが街中の自然な風景になって久しい。フードデリバリーサービス「Uber Eats」のビジネスモデルは消費者、飲食店、宅配業者をマッチングするプラットフォームを提供することで対価を得るというものである。こうしたプラットフォームを活用したギグワークはすき間時間を有効活用し、「自由な働き方」ができるということで注目されている。

しかし、このプラットフォームビジネスが日常になるにつれてその負の側面も顕在化している。ケン・ローチ監督の映画「家族を想うとき」では、個人事業主で個人ドライバーの主人公が仕事と家族の間で苦悩する姿が描かれている。このように、今プラットフォームビジネスのあり方が問われていると言える。そのような中で、本書は、プラットフォームに注目し、現代のプラットフォーム資本主義の現状と問題点、そのオルタナティブとしてのプラットフォーム協同組合の可能性を論じている。

まず、本書の内容を簡単にみていく。本書は3章構成になっている。

「第1章 プラットフォーム協同組合の現在と未来」では、2つの論考が紹介されている。最初のヤルト・チャンドラ氏（香港理工大学准教授）の「プラットフォーム協同組合」では、新しいテクノロジーがプラットフォーム資本主義を生み出しているが、それは「労働者に対する不公正」と「伝統的なサービス産業へ

の脅威の上に成り立っている」（本書18ページ）ものであり、依然として労働者は分配において弱い立場にある。チャンドラ氏は、このプラットフォーム資本主義のオルタナティブが「Fairbnb」（オランダ）などのプラットフォーム協同組合であるという。プラットフォーム協同組合とは「多数の人間と組織を集め、参加者が所有者となるオンラインの協同組合」（16ページ）であり、そこでは、「コモンズの論理」と「ビジネスの論理」の2つの論理に基づき運営されることで参加者により公正に分配されることになる。プラットフォーム協同組合への期待は高まる一方で、「多くの国では一般的に、協同組合のシステムが十分に確立していない」など運営者にとっての5つの課題と政策の支援の必要性などを挙げている。

2本目の伊藤富雄氏（コワーキング協同組合代理理事）の「コワーキングの精神とプラットフォーム協同組合の展望」では、コワーキングスペースについてコワーキング概念の歴史からひもといた上で、自身で実際に立ち上げたプラットフォーム協同組合「JOB BOARD」の経験や、海外の先行事例「Enspiral」から、海外ではLoomioやCobudgetなど意思決定や資金の調達・管理にウェブツールが活用されているのに対して、プラットフォーム協同組合の不可欠の要件として協働するためのシステムを自前で持っているなど5つの要素を挙げた上で、日本では法整備と資金調達の方法などが大きな課

題であると指摘している。

「第2章 プラットフォームの現場で」は章タイトル通りプラットフォームで実際に働く若者に対するインタビュー記事が2本掲載されている。1つは民泊で清掃の仕事に携わる女性の話で、2つ目は「Uber Eats」の配達パートナーになった大学生のインタビューである。仕事内容や給与、労働条件などが当事者の言葉で語られている。

「第3章 ブロックチェーンはプラットフォームをどう変えるか」は、松尾匡氏（立命館大学経済学部教授）と渡辺草太氏（法政大学経営学部生）との対談を掲載している。大学教授と学部生の対談という点でも珍しいが、さらに学部生である渡辺氏ではなく松尾氏が聞き手を担い、渡辺氏が関心をもって取り組んでいるブロックチェーンやビットコインの仕組みなどについてクリプト・アナキズムやトークン・エコノミー、ODEM など最先端の技術を用いたビジネスに関連する論点について話し合っている。最後に、松尾氏がマルクスの貨幣論に触れた上で、ブロックチェーンのようなテクノロジーを組み込んだ社会システムの展望を示している。

さらに、第2章と第3章の後半に海外の民泊プラットフォーム協同組合「Fairbnb」と分散型教育プラットフォーム「ODEM」に対するインタビューが掲載されている。

ここまで述べてきたように本書の中で研究者によって執筆されたものは第1章のチャンドラ氏の1本だけで、第3章の松尾氏の対談を含めても2本だけである。大半は、プラットフォーム協同組合の運営者やプラットフォームサービスに携わる若者によるものである。これが本書の大きな特長である。プラットフォームに実際携わる人の声を直接取り上げることで現状を直接的で、生々しく伝えている。

たとえば、現場で働く若者の声を取り上げた第2章では、一般的なホテルの清掃業務が「絶

対に皺1つ残しちゃいけない、髪の毛一本残っていたらクレームが来る」(64ページ)など様々な面で制約や規則があるのに対し、民泊ではそこまで神経質にならなくてもよく、かなり自由に働くことができるといった既存のビジネスと比較した時の長所がある一方で、給与は「それ一本で生活していくには厳しいところ」(65ページ)があるなどデメリットも語られている。「Uber Eats」の配達パートナーへのインタビューでは、仕事を始めたきっかけやビジネスの仕組みなどがエピソードを交えて紹介されている。さらに社会学を学ぶ学生の目線から「Uber Eats」の中にある権力関係について分析が試みられている。

また、プラットフォーム協同組合について、海外の事例が紹介されており、理念やコンセプト、仕組みなどが紹介されており、今後実際に運営を考える際に示唆を与えている。

しかし、プラットフォーム協同組合がなぜプラットフォーム資本主義よりも優れているのかについて十分に検討されていなかった。チャンドラ氏が既存の協同組合を論じる流れの中で「協同組合が真に効果的で、より公正・公平な組織化の手段なのだとすれば、なぜ私たちは経済に貢献するほどの影響力を持つまでに成長する協同組合を目にしないだろうか」(15ページ)と述べているが、これはそのままプラットフォーム協同組合に当てはまる論点である。具体的にどのような点でプラットフォーム協同組合はより効果的で効率的に財やサービスが提供できるのか、などさらに検討が求められる。

しかし、上で述べた不十分さも大きくはプラットフォーム協同組合自体がまだ少数で、成長途上にあるという現実による点が大きいと考えられる。最初に述べたように今はプラットフォームビジネスのあり方が問われている時代である。本書はそうした中で現場の声をきき、問題の所在を理解させてくれるのに適した本であるといえるだろう。